

須弥座について

片岡 直樹

一、「須弥座」の語義

今日一般に須弥座と呼ばれる仏像の台座は、ふつう四角い箱形の腰部の上下に幅の広い框を設けた形式のものをいい、これを須弥壇と呼ぶこともある。こうした形式の台座はすでにガンダーラなど初期の仏教美術にみることができ、中国や朝鮮にも多くの作例がのこされている。日本では推古天皇の三十一年（六二三）に完成した法隆寺金堂釈迦三尊像（図1）の台座が代表的な遺例で、その正面観から宣字座（宣字形台座）とも呼ばれるその形式は飛鳥後期の法輪寺薬師如来像（図2）、白鳳期の當麻寺金堂弥勒仏像、天平初期の薬師寺金堂薬師如来像の台座へと引き継がれていく。

一般に須弥座はその呼び名のとおり仏教の世界山である須弥山をかたどったものといわれるが、確証はない。試みにこの須弥座について手元にある辞典を引くと次のような説明がなされている。

『大漢和辞典』「須弥座」項（1）

須弥壇ともいふ。形、須弥山に象り、中細い台座。其の上に本尊を安置する。

『広辞苑』「須弥壇」項（2）

寺院の仏殿の、仏像を安置する壇。須弥山にかたどったという。四角・八角・円形などがあり、木・土などでつくる。須弥座。仏座（ほとけのざ）。

『望月仏教大辞典』「須弥壇」項（3）

須弥山に象れる壇。即ち木又は金石等を以て須弥山形の壇を作り、仏像を安置するを云ふ。但し須弥頂上は所謂初利天宮の所在処なるが故に、帝釈天の之に坐するは其の理ありと雖も、之を仏の所在処となすに關しては古来未だ其の説を見ず。或は仏が一夏初利天に上りて母の為に說法せられ、之に起原して仏像が始めて彫刻せられたりと伝へらるゝより、須弥山を以て仏座となすに至りしものか。或は大智度論第八に蓮華座は梵天の所坐なるも、仏は世俗に隨ふが故に之を座となすと云ふに准じ、須弥山は帝釈天の所座なるも、世俗に隨つて亦之を仏の座所となしたるものか。

『岩波仏教辞典』『須弥壇』項(4)

仏教寺院の本堂ないし諸堂の正面に据えて、その上に本尊その他の仏像を安置する大型の壇で須弥山を象つたもの。平安時代までは四角の箱型で、鎌倉時代に禅宗の渡来とともに上下が広く、中央に行くに従つて幅が狭まり、上下とも16段に変化するより象徴的な形式が興つた。その由来は不明であるが、須弥山は本来帝釈天王の所住の処であり、帝釈天が諸天の帝王としてその威徳を崇められるのになぞらえて、人天の法王である仏の尊厳を示さんとしたものと想像される。なお、須弥壇の用語は近世にはいつてからのものらしく、中世までは 仏壇 と称している。

このうち、まず の諸橋『大漢和辞典』の説明は簡にして要を得たもので、とくに「中細い台座」という表現は、上下に幅の広い框を広げ、腰部の細い須弥座(宣字座)の特徴をうまく言い表している。ただ須弥山との関係については「形、須弥山に象り」と断定的な表現となっている。それに対して の『広辞苑』は、「須弥山にかたどつたという」と含みのある言い方をしており、その事情をさらに詳しく述べているのが の『望月仏教大辞典』ということになる。



図2 法輪寺薬師如来像



図1 法隆寺金堂釈迦三尊像

『望月仏教大辞典』は、冒頭では「須弥山に象れる壇」としながらも、「但し須弥頂上は所謂初利天宮の所在処なるが故に、帝釈天の之に坐するは其の理ありと雖も、之を仏の所在処となくすに關しては古來未だ其の説を見ず。」と疑義を呈し、さらには「或は仏が一夏初利天に上りて母の為に説法せられ、之に起原して仏像が始めて彫刻せられたりと伝へらるゝより、須弥山を以て仏座となすに至りしものか。或は大智度論第八に蓮華座は梵天の所坐なるも、仏は世俗に隨ふが故に之を座となすと云ふに准じ、須弥山は帝釈天の所坐なるも、世俗に隨つて亦之を仏の座所となしたるものか。」と苦しい解釈を載せている。

すなわち須弥山をかたどった台座の上に帝釈天がのるのは理屈に合うが、それ以外の仏像がのるしかるべき理由は見あたらないというのであり、結局のところ今日われわれが「須弥座」と呼ぶ台座が須弥山の形状を摸したものであるかどうかはわからないということなのである。の『岩波仏教辞典』も同じような説明をしている。インド・中国美術の研究においてもこの問題に対する確かな解答は得られていないようである。

そこでこの小論では、日本古代の須弥座の用語例および用例に限定し、須弥座の諸問題とその形状がもつ意味を考えてみることにしたい。

なお、須弥座は須弥壇と呼ばれることもある。の各辞典にもそう記されているし、諸書にみる仏像の解説文などには須弥座・須弥壇の語を区別なく用いているものもある。しかしながら、元来「土を盛り上げて築いた」意で、「祭壇」「花壇」等かなりの広さをもった場をイメージさせる「壇」と、材質に関わらず「蓮華座」「瑟瑟座」など一体の仏像が坐すほどの比較的狭い場をイメージさせる「座」とでは語のもつ印象が異なるように思う。実際、の辞典のうち「須弥座」で項目を立てるは「其の上に本尊を安置する」とあるように一体の（ないしは三尊像のように少数の）仏像をのせる比較的小型の台座のニュアンスでとらえられているのに対して、「須弥壇」で立項するとは仏殿の建物内部に据え付けられた大型の壇として記述されている（）。また、後述のように、本稿が考察の対象とする四角い箱形の腰部の上下に幅の広い框を設けた形式の仏座（いわゆる宣字座）は、日本では古くから「須弥座」と呼ばれてきたものである。

多くの人々の使用法がその時代の標準形となり、時の経過とともに意味用法が変化する言葉の問題は、私一人が使い分けを主張したところで無意味であろうし、必ずしも元来の呼称を守ればよいというものでもなからうが、本稿では四角い箱形の腰

部の上下に幅の広い框を設けた仏座（宣字座）を「須弥座」と呼び、仏殿内部に据え付けられ、多くの仏像をのせるための大型仏壇である「須弥壇」と区別して用いることにしたい。

二、須弥山の形状

須弥座と須弥山の関わりについて考えるにあたり、まず須弥山の形状を確認しておくことにしたい。須弥山の形状に言及する経典には主として次のようなものがある。

『長阿含経』（後秦・佛陀耶舍共竺佛念訳）（6）
其山直上。無有阿曲。

『立世阿毘曇論』（陳・真諦訳）（7）

四角端直。譬如工匠善用繩墨成板柱。其形方正。是須弥山。亦復半形入水。八万由旬。半形出水。八万由旬。其山四辺。各八万由旬。周迴三十二由旬。

『阿毘達磨俱舍論』（唐・玄奘三蔵訳）（8）

図3 参照

『大樓炭經』（西晉・法立共法炬訳）（9）
下狭上稍稍広。上正平。

『起世経』（隋・闍那崛多等訳）（10）
下狭上闊。漸漸寛大。

端直不曲。

『起世因本経』（隋・達摩笈多訳）（11）
下狭上広。漸漸寛大。

端直不曲。

このうちの『阿毘達磨俱舍論』（いわゆる『俱舍論』）には須弥山の形状について詳細な記述がなされているが、ここでは

定方晟氏の作図（図3）

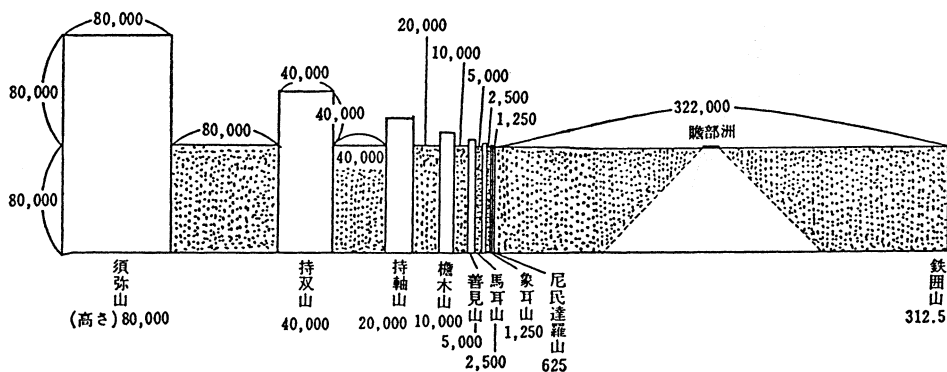


図3 『俱舍論』の須弥山（定方晟氏による）

によっておおよそのかたちを把握しておく⁽¹²⁾。須弥山は高さ八万由旬（海中の部分も八万由旬）⁽¹³⁾の正四角柱状の高山で、周囲を海に囲まれ、さらにその周りには内から持双山・持軸山・檐木山・善見山・馬耳山・象耳山・尼民達羅山・鉄围山の各山が同心正方形状にこれを取り巻いているのだという。

さて、の経典をみると、須弥山の形態的特徴は次の三点に集約されることがわかる。

- A. 垂直に聳えている。
- B. 四角柱状である。
- C. 下は狭く、上に行くにしたがって広くなる。

つまりの『長阿含経』、の『立世阿毘曇論』、の『阿毘達磨俱舍論』はAとBの組み合わせに成るものであり、の『大樓炭経』、の『起世経』、の『起世因本経』はAとCの組み合わせに成るものである。本稿でいう須弥座の形状はA・B・Cすべての特徴を併せもったものといえることができるだろう。

三、「須弥座」の用例

次に「須弥座」（一部「須弥壇」）の語の用例を列挙する。管見による限りのものでこれ以外の用例もあると思うが、挙げて以下の考察の材料としたい。

王勃「梓州飛鳥臯白鶴寺碑」

臯令梁宏悦、臯丞梁敬一…（中略）…争開「舍利之壇」、

俯「会衆心」、競起「須弥之座」。

王勃「梓州慧義寺碑銘并序」

弥勒下生像一鋪、諸仏新变相一龕…（中略）…如来応化

上辞「兜率之天」、菩薩分身、下入「須弥之座」。

『薬師寺縁起』（長和四年・一一五）金堂条

其堂中安「置丈六金銅須弥座薬師像一軀」。

『七大寺日記』（嘉承元年・一一六）大安寺金堂条

金堂釈迦、丈六、東等身金銅阿弥陀、須弥座、件仏背光左右、宝樹形以板刻造之、

『七大寺巡礼私記』（保延六年・一一四）大安寺金堂条

等身金銅阿弥陀仏^{須弥座}、脇侍二軀、観音勢至木像也、

『七大寺巡礼私記』薬師寺金堂条

中尊金銅丈六薬師像^{須弥座}、身光刻「付半出七仏薬師像」、又

縁光彫「飛天十九軀」、其須弥炎刻「宝塔一基」、(14)

『七大寺巡礼私記』東大寺大仏脇土井丈尺事条

(金刀) 色^{金刀}并坐像二軀^{大各三丈}、皆八角須弥座^{中略}：斯二

井、中尊石座之外、別坐「須弥座」、

『扶桑略記』(十二世紀初)白鳳九年条

薬師寺金堂、安置丈六金銅須弥座薬師像一軀、

『聖徳太子伝私記』(嘉禎四年・一二三八)卷上、法隆寺金堂条

次向東戸有「厨子」、推古天皇御厨子也、其形腰細也^{蓋須弥座}、以「玉虫羽」以^レ銅彫透唐草下臥^レ之、

『聖徳太子伝私記』卷上、法隆寺金堂条

次西戸方有「厨子」^{黒漆須弥坐}、光明皇后之母、橘夫人所^レ造也、

内在「弥陀三尊」^{古帳弥勒三尊云々}、以「金銅」敷^レ地、作「波文」

中生「蓮花二本」、其上令^レ坐「三尊」、太子已後者也、高八尺

『聖徳太子伝私記』卷上、上宮王院条

石壇二重、最上名「須弥壇」、

『聖徳太子伝私記』卷上、法隆寺問寺条

次西間須弥壇阿弥陀三尊像、間人皇女聖徳太子高橋妃御本
体故、尤根本本尊也

このうち とは中国の用例である。は諸橋『大漢和辞典』
「須弥座」項が用例として引くもの。初唐の王勃(六五〜六
七六年)による碑文の一節で全文が『全唐文』に載る(15)。こ
れによれば白鶴寺は梁武帝の建てる所といい、県令の梁宏悦、
県丞の梁敬一らが「争ひて舍利の壇を開き、会衆の心を俯して、
競ひて須弥の座を起つ。」とある。ここでいう「須弥之座」とは、
「舍利之壇」と対置されていることからみておそらくは仏像の
台座のことであろうが、その形状がどのようなものであるかは
わからない。

も王勃の碑文で、同じく『全唐文』に載る(16)。王勃勒下生

像一鋪」中にあらわされた仏座と目されるが、こちらはその形状は不明である。また、その仏座が須弥山にちなむものか、あるいはたんに「高い」台座を意味するものか、こうしたこともわからないというほかない。中国の用例はまだまだあるだろうが参考までに二例ばかりを引いておく。

以下はすべて日本の用例である。は現時点で知り得た日本でもっとも古い「須弥座」の用例で、いうまでもなく現存する薬師寺金堂本尊像の台座(図4)を「須弥座」と言い表したものである。とにも同じ作品についての同様の言い方がみられる。の記述は に基づくものであろう。

と は大安寺の同一の仏像について記されたものであり、は東大寺大仏脇土像について記されたもの。これらの像は現存しないが、「須弥座」と表記されているからには宣字形の台座にのつていたものであろう。

は法隆寺の玉虫厨子(図5)で、宮殿部(厨子本体)をのせる宣字座部分を「須弥座」と言い表している。その形状を「其形腰細也」とするのは宣字形の台座の特征的なかたちをよく示している。は のすぐあとに続く箇所と同じようなかたちの台座をもつ伝橘夫人念持仏厨子をいったものである。



図4 薬師寺金堂薬師如来像台座(背面)



図5 法隆寺玉虫厨子

四、「須弥座」の始用

さて、右の用例は数としては限られたものであるが、これによつていくつかが指摘できる。まず日本における「須弥座」の語の始用時期であるが、右で述べたように『薬師寺縁起』(一一一五年)のそれが最古の用例である。これに先立つ奈良朝成立の史書、資財帳の類には「須弥座」の語はみえない。このことから日本において「須弥座」の語が使い始められた時期は十一世紀初頭前後という線が浮かび上がってくる。今後用

例が増えれば時代的にもう少し上がる可能性はあるが、そう古くはさかのぼらないであろう(17)。

また(十一〜十二世紀)の「須弥座」の語はいずれも仏像一体がのるような宣字形の台座を言っており、多数の仏像を安置するような大型の壇をそのように称した例は一つもない。したがって当時須弥座と須弥壇とは意味的に区別されていたと考えてよいだろう。このことは『聖徳太子伝私記』(二二三八)が「須弥座」「須弥壇」両方の語を使用しながら、「須弥壇」は大型の壇に対して用いられていることから明らかである(18)。

さらに興味深いのは、大江親通の『七大寺日記』(一一一六年)および『七大寺巡礼私記』(一一四一年)には上記のようないくつかが「須弥座」の用例がある一方で、「蓮華座」の語がほとんどみられないことである。この両書を通じて「蓮華座」の使用例は『七大寺巡礼私記』興福寺東金堂条に「金銅尺迦坐像高三尺許、蓮華座有垂裳」とあるたつた一例のみなのである。当時親通が見た諸寺の仏像には蓮華座にのるものの方がはるかに多かったはずであるが、このことはいったい何を意味するのであろうか。親通の興味の主として奈良時代の古い仏像に向けられていて、平安以降もつぱらつくられた蓮華座にのる仏像に

はさして注意が払われなかったことも一因であろうが、理由はそればかりではないように思われる。

右の興福寺東金堂釈迦像の例では「蓮華座」とした後に「有垂裳」との添え書きがある。この像は現存しないが、おそらくその垂裳は、裳を透してその下に並んだ蓮弁の凹凸がはつきりとわかるような特徴的な形式であったと想像される。こうした垂裳は中世以降の彫刻作品にまま見られるものであるが親通の目には奇異なものに映り、特記事項として書き加えられたものと考えられる。つまりこの「蓮華座」の語は特徴的な垂裳をもつが故にとくに書き留められたもので、そうでない一般的な蓮華座はとりたてて記述の対象とはならなかったのであろう。

右の事例以外にも親通には奇異なもの、めずらしいものを多く書き留める傾向があるが、この宣字形の須弥座はそのような観点から特記事項として記されたものと考えられる。むしろ「須弥座」の語を用いたのは親通ばかりでなく、の『薬師寺縁起』やこれによったと思われるの『扶桑略記』の筆者らも共通の認識の下にこの語を用いたものであろう。すなわち日本における「須弥座」の語は当時一般的であった蓮華座との区別をはかるために平安中期以降に用いられるようになったものと考えて大過ないように思われる。

五、須弥座の意味

日本における須弥座（宣字座）の作例には冒頭でもふれた法隆寺金堂釈迦三尊像（図1）の台座や法輪寺薬師如来像（図2）の台座のほか、法隆寺金堂薬師如来像・同阿弥陀如来像・當麻寺金堂弥勒仏像・薬師寺金堂薬師如来像の台座（図4）、さらには法隆寺玉虫厨子（図5）の台座などがある。これらは須弥山を模したものであるだろうか。

その形状についてはこれまで記してきたとおりだが、このうち法隆寺金堂安置の釈迦三尊像（中の間）・薬師如来像（東の間）・阿弥陀如来像（西の間）の各須弥座には腰部四面の鏡板に彩画のあることが知られており¹⁹、玉虫厨子の須弥座腰部の四面にも彩画が施されている。本章ではそれらを手がかりに須弥座の意味を探ってみることにしたい。

まず釈迦三尊像の台座（図6）は二つの宣字座を上下に重ねたもので、それぞれをふつう上座・下座と呼んでいる。両座ともに古式を示し造像銘の推古天皇三十一年（六三三）と同時にそれをさほど隔たらない時期の制作と考えられている。下座の鏡板の四面には山岳（図7）・叢林・飛天などが描かれ、正面には向かい合う二頭の獅子が、両側面には四天王かと思われる天

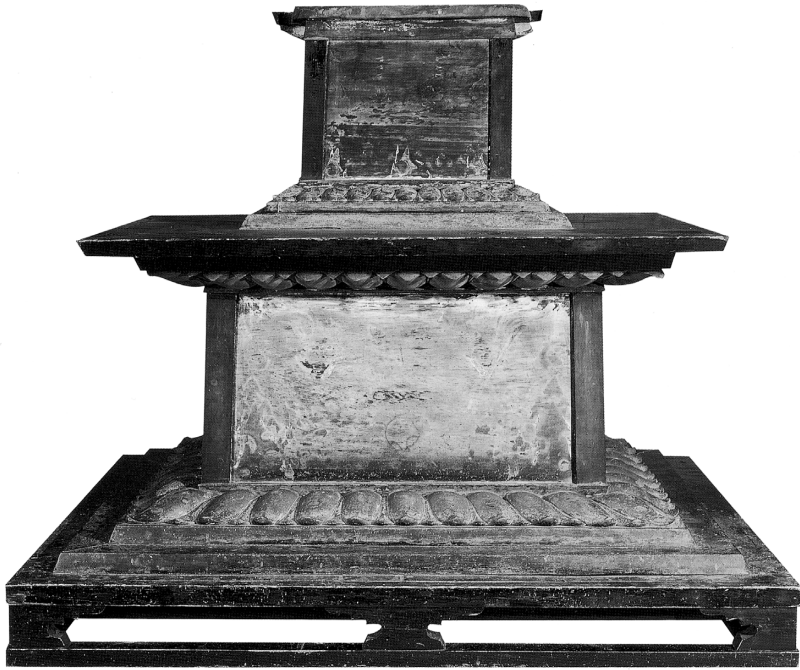


図6 法隆寺金堂釈迦三尊像台座



図7 同下座背面 山岳（赤外線写真）



図8 同下座側面 天部像



図9 同上座背面 山岳



図10 法隆寺金堂薬師如来像台座

部像(図8)が各面に二昧ずつ描かれている。また上座にも山岳(図9)や飛天、山中で修行する(?)人物像などが描かれている。

薬師像の台座(図10)も同様の二重宣字座であるが、上座と下座には彩画の様式に時代差のあることが指摘されている(20)。より古いのは下座で、釈迦三尊像の台座と同時期のものと考えられており、剥落が甚だしいもののその鏡板には獅子(図11)・山岳(図12)・僧形像などの痕跡が認められる。上座はこれよりやや遅く七世紀後半、末頃の作とみられているが、その四面に



図12 同下座背面 山岳



図11 同下座側面 獅子



図13 同上座正面（赤外線写真）

も山岳（図13）が描かれている（21）。

阿弥陀像の台座（図14）もまた二重の宣字座であるが、このうち上座は鎌倉時代（貞永元年・一一三三）に像が新鑄された際の補作である。下座は釈迦三尊像台座と同時期のものとみられ、正面と背面に山岳（図15）を、両側面に二軀ずつの天部像を描く点はこれと共通する。

さて、これらの台座にみられる山岳表現や四天王かと思われる天部像の存在からはただちに須弥山が想起される。ことに釈迦三尊像の台座に関しては先学によつてそうした指摘がなされており、たとえば松浦正昭氏は、「三尊をのせる二重台座の四面には、仏教に説かれる須弥山世界を表わすさまざまな図柄が描かれており、仏像と台座絵を合わせた全体が、須弥山上方に位置する釈迦浄土を立体的に表わすように構想されている」と言われ（22）、浅井和春氏は、「このような二重の台座に坐す中尊の釈迦如来坐像は、まさに須弥山世界の靈山浄土上にあつて、師子座にすわり、三昧ののち起きて世界を凝視し、微笑したと説く経典（『大智度論』）の内容を具体化したもの」とされる（23）。たしかに釈迦三尊像の台座については私も右のような解釈が可能と考える。しかしながら他の作例についてはどうであろうか。たとえば右のような須弥座の解釈はこの台座が釈迦像を頂

くことを前提とするが、薬師像や阿弥陀像の場合には「釈迦浄土」「靈山浄土」はそぐわない。このことはあくとしても（24）薬師像の台座には山岳図は描かれていても四天王とみなしうる。天部像は描かれておらず、この点も須弥座（宣字形の台座）を



図14 法隆寺金堂阿弥陀如来像台座

ただちに須弥山をあらわしたものとみなすことを躊躇させる。事情はもう少し複雑であろう。



図15 同下座背面 山岳



図16 法隆寺玉虫厨子宮殿部正面 天部像

法隆寺玉虫厨子の台座は縦長の須弥座とこれを支える脚部とから成り、その上に厨子本体である宮殿部がついている。宮殿部の軸部正面中央と左右両側面にはそれぞれ両開きの扉が取り付けられており、このうち正面の扉には邪鬼を踏まえた天部像（図16）が、側面の扉には菩薩像（図17）が、各一軀ずつ描かれる。背面には山岳上に三基の塔がのる図様があらわされている（図18）（25）



図17 同宮殿部側面 菩薩像

このうち両側面の彩画は捨身飼虎図（図19）・施身聞偈図（図20）としてよく知られるものである。いずれも釈尊の前生の物語を絵画化したいわゆる本生図であるが、前者は釈尊の前生たる薩埵太子が狩りで山中に分け入った際、餓死しかけた母子虎に遭遇し、これを救うために懸崖から身を投げて我が身を食わせたという話。後者は前生たる雪山童子が山中（雪山＝ヒマラヤ）で修行中に一匹の鬼と出遭い、自らの命と引き換えに真理を説いた偈頌を聞くというものである。いずれも六朝絵画の流れを

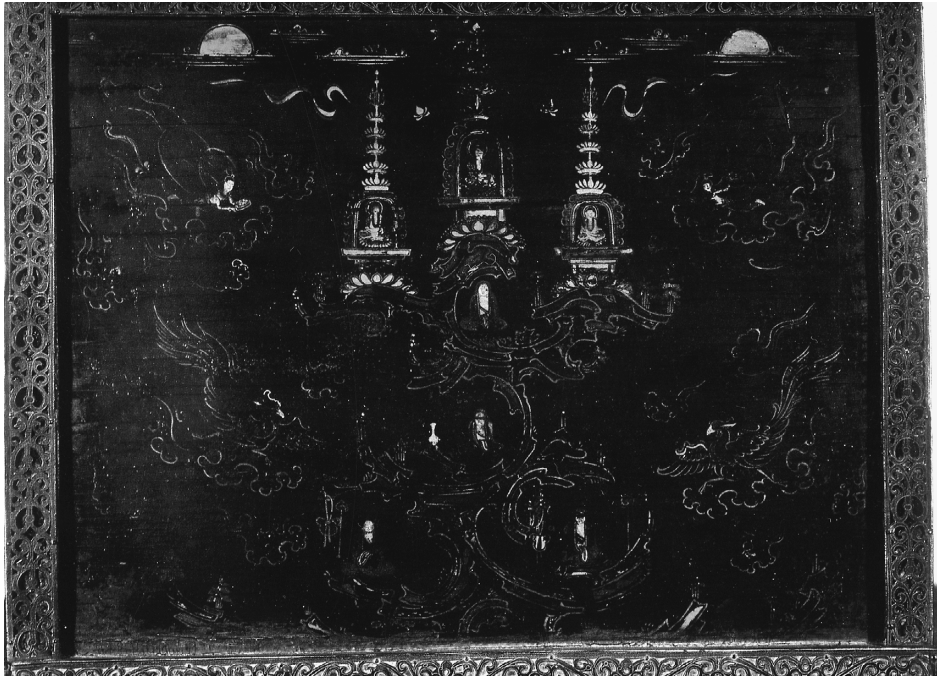


図18 同宮殿部背面 山岳

汲む古式の手法で山岳・岩・土坡・樹木などが描かれており、とくにモザイク状の岩の連続によってあらわされた山岳の表現は特徴的である。

須弥座正面には中央に上下にわたって三個の香炉状のものがあらわされ、これをはさんで左右対称的に、上から一對の飛天・比丘・獅子が描かれている(図21)。飛天は各々片手を出し合って一つの香炉を捧げ持っている。二比丘はそれぞれ柄香炉を執り、左右から突き出したテラス状の岩の上に坐す。獅子は画面の左右下隅にあつて、これも特徴的なかたちの岩の上ののっている。この図様については古くからの舍利供養図説のほか複数の解釈があつて定説をみないが、二比丘および獅子が坐すモザイク状の岩の表現や、そこに生える竹の様子などは須弥座両側面の彩画に共通するもので、これが山中の光景をあらわしたものであることを示している。

須弥座の背面に描かれた彩画(図22)には、画面下部に三尊のいる宮殿を中心に大海が描かれ、そこから上に向かって高く聳え立つ山岳の様子があらわされている。山岳の頂上と中腹には計五つの建物が描かれており、根元には竜が巻き付いている。この山岳については早くに小野玄妙氏が頂上の宮殿を切利天、中腹の四つの建物を四天王宮とみてこれを須弥山とする解釈を



図21 同須弥座正面 舍利供養図？



図19 玉虫厨子須弥座左側面 捨身飼虎図

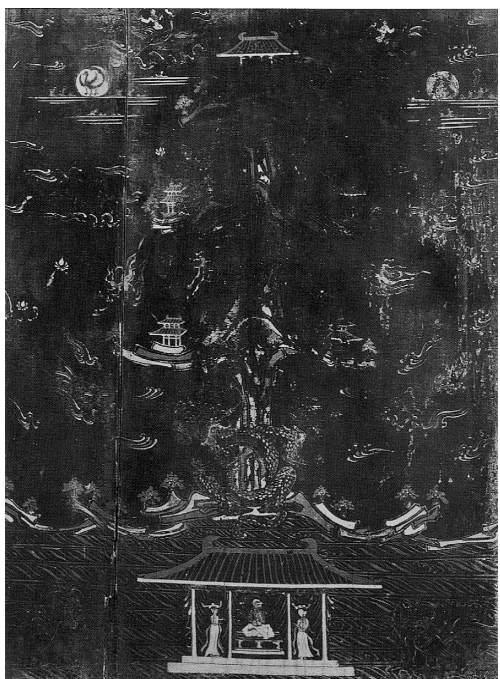


図22 同須弥座背面 須弥山図



図20 同須弥座右側面 施身問偈図

示され⁽²⁶⁾、以来ほぼ異論のないところである。

以上のような玉虫厨子の彩画を通覧すると、ことにその須弥座に描かれた光景に一つの共通点があることに気づく。四面がともに山岳景をあらわしていることで、このことは金堂諸像の須弥座にも共通する。

では、この玉虫厨子の須弥座各面の彩画がすべて須弥山をあらわしたものであるかというと、解釈の分かれる正面の図様はさておくとしても、両側面の彩画すなわち捨身飼虎図・施身聞偈図については明らかにそれにはあたらない。いうまでもなく薩埵太子が二人の兄とともに狩りに出かけた場所は須弥山ではなく、また雪山童子の物語はその名のごとく雪山を舞台としたもので、これも須弥山での話ではないからである。

一方、須弥座の背面には須弥山図が描かれているわけであるが、仮に須弥座のかたち自体が須弥山をあらわすものであるならば、あえてここに須弥山の図様を描く必要はないわけで⁽²⁷⁾、このことは逆にすべての須弥座が須弥山としての意味をもつものではないことを示唆しよう。

彩画を有する法隆寺金堂諸像および玉虫厨子の台座の検討からいえることは、四角い箱形の腰部の上下に幅の広い框を設けた須弥座(宣字座)は、そのかたちこそ前掲の經典に示

される須弥山の姿に似るが、それは単に山岳(ないしは高山)の表象であるにすぎず、ただちに須弥山を意味するものではないということである。少なくとも当時の日本において常に「須弥座」「須弥山」という概念が存したかというところではないものといわざるをえない。

六、須弥山としての須弥座

以上のように当時の日本における須弥座は必ずしも須弥山を意味するものではないが、それが山岳(ないしは高山)としての性質を帯びるものとするならば、その須弥座をもつて須弥山をあらわすことはできないであろうか。たとえば前述の法隆寺金堂釈迦三尊像の台座の例はどのように解釈すればよいのだろうか。小論を締めくくるにあたり須弥山をあらわす須弥壇について私なりの解釈を付しておくことにしたい。

このことを考える上で鍵となるのは飛鳥・奈良時代の日本において須弥山の形状がどのように認識されていたかということであるが、手がかりの一つはやはり玉虫厨子の彩画にある。先にみたとおり厨子の須弥座背面には須弥山が描かれているが(図22)、そのかたちは数段にわたってテラス状部分を設けた重

層的なものである。同じようなかたちの須弥山はやや時代は降るものの東大寺大仏蓮弁の線刻画(図23)(28)にもあらわされている。蓮弁線刻画のそれは俯瞰的に描かれているが、これを真横からの視点で描いたものが玉虫厨子の須弥山図ということになる。

また、大阪四天王寺五重塔の地下に検出された石組みもこうした重層型須弥山の一例である可能性がある。昭和九年(一九三四)の台風で倒壊した同塔の地下からは心礎の下に外方内円形の木炭層が発見されたが、この木炭層の内部には粘土が充填されており、その中には上下五層にわたって石組みが配置されていた。同寺

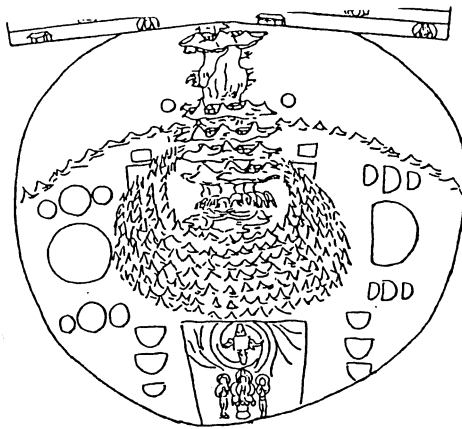


図23 東大寺大仏蓮弁線刻画 須弥山図

元管長の出口常順氏は玉虫厨子の須弥山図およびペリ才将来の敦煌画(三界九地之図)中の須弥山図との類似からこの方

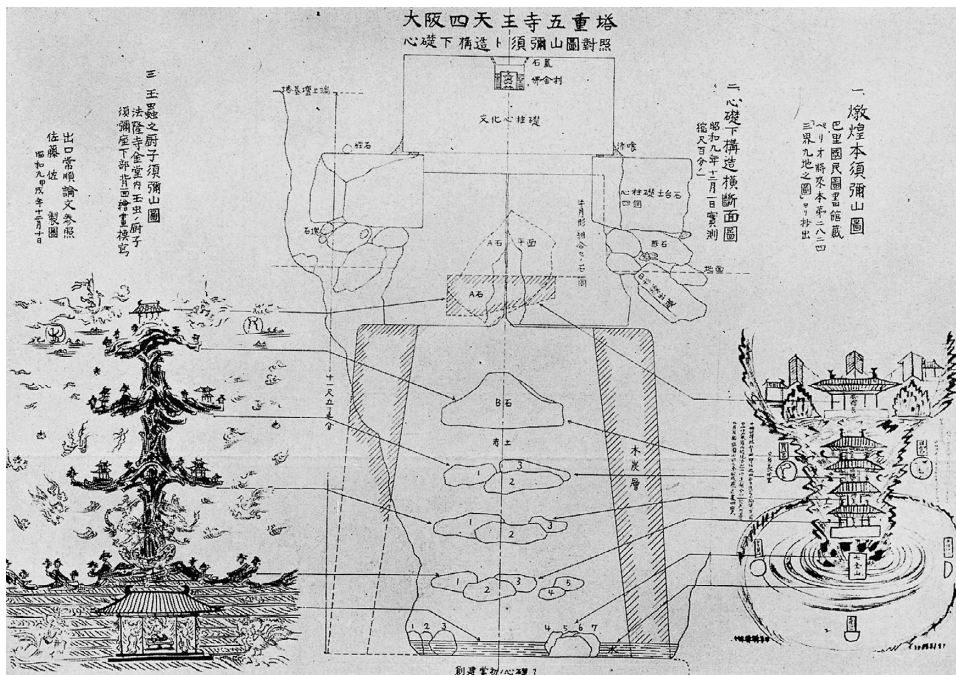


図24 大阪・四天王寺五重塔地下遺構図

形の木炭層と石組みとを須弥山を表現したものとみなし、仏舍利を安置する塔が堅固な須弥山の上に建てられることを願ったとの解釈を示されている(図24)(29)。

右のような須弥山の形状について出口氏は『阿毘達磨俱舍論』第十一に「蘇迷廬山に四層級あり。…この四層級は妙高山より傍出し圍繞して其の下半に尽く。」云々(30)とあるのを典拠とされているが、一方で大仏蓮弁線刻画の所依經典としては『華嚴經』『梵網經』のほか『大智度論』を重視する見方(31)もあり、また玉虫厨子の須弥山図については『海竜王経』を典拠とする見方(32)などもあって、重層型の須弥山の典拠はいまだちに特定できない。しかしながらのこされた作例をみる限り飛鳥・奈良時代に認識されていた須弥山の定型が右のような重層型のものであったことは確かなことといえるだろう。

そこで思い至るのが法隆寺金堂釈迦三尊像の二重の宣字座とこつした重層型須弥山との形状の類似である。宣字座を上下に重ねること重層型須弥山に特有の数段にわたるテラス状部分がかたちづくられることになる。描き起し図によって両者を比較すればその形状の類似はより明瞭になるだろう(図25・図26)(33)。すなわち、単体での須弥座はたんに山岳や高山をあらわすが、これを二重にかさねることによって仏教世界の中心に聳

え立つ須弥山をより効果的にあらわそうとしたのではなからうか。

飛鳥・奈良時代の須弥座の問題については述べ足りない点も多いが、このあたりでひとまず筆を擱くことにしたい。

註

(1) 諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店、一九六一年、第一刷、第二卷、二四頁)。

(2) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、一九九八年、第五版)。

(3) 望月信成『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行協会、一九三六年、第一刷、第三卷、二五二―二五三頁)。

(4) 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九九九年、第一刷)。

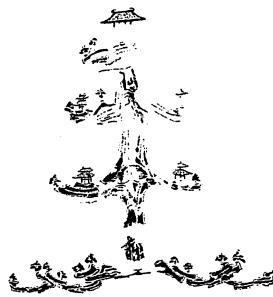


図26 玉虫厨子須弥山図
(描き起し図)

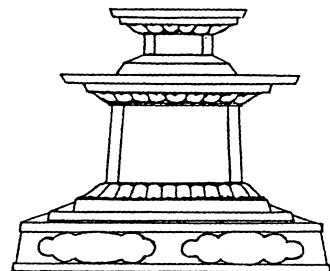


図25 法隆寺金堂釈迦三尊像台座
(描き起し図)

(5) の『望月仏教大辞典』は同項目内の挿図キャプションにおいて、四角い箱形の腰部の上下に幅の広い框を設ける形式の仏座(宣字座)を「須弥座」、より大型の仏壇(宣字座ではない)を「須弥壇」と記して区別をはかっている。

(6) 『長阿含經』第四分「世記經」、大正蔵第一卷一一四頁。

(7) 『立世阿毘曇論』、大正蔵第三卷一八一頁。

(8) 『阿毘達磨俱舍論』、大正蔵第二九卷五九〇頁。

(9) 『大樓炭經』卷一、大正蔵第一卷二七七頁。

(10) 『起世經』大正蔵第一卷三二〇頁。

(11) 『起世因本經』大正蔵第一卷三六五頁。

(12) 定方晟『須弥山と極楽』(講談社現代新書、一九七九年)。

(13) 一由旬は七万キロメートルという。

(14) このほか須弥座に似た語として「須弥炎」があり、本文にあげた『七大寺巡礼私記』薬師寺金堂条中にこの語がみえるほか、同書大安寺金堂条、興福寺西金堂条にも使用例がある。この「須弥炎」について口頭発表(文末「付記」参照)時には「須弥座から立ち上る炎の意で光背のこと」と解して須弥座の用例に加えておいたところ、星山晋也・齊藤理恵子両氏より、『七大寺巡礼私記』の当該箇所では光背そのものは「光」と表現されているから、「須弥炎」はsumeru(妙高)の

意に基づき「光背の頂部」と解釈すべきではないかとの御指摘を受けた。いまこれに従いたい。

『七大寺巡礼私記』大安寺金堂条

中尊金六尺迦坐像^{以右足敷下、左足置上}、迎接印也、光中化仏十二

二躰、飛天十二躰、須弥炎安多宝塔、其塔迴有雲形、

『同』興福寺西金堂条

中尊金色丈六尺迦像^{以左足置上、右手掌レ臂掌向レ外}申「五指」、

左手置「膝上」申「大指」残曲之、光中伎楽^并十六躰、須弥炎

安^二如意宝珠^一、

(15) 『全唐文』卷一八四所収。

(16) 『全唐文』卷一八四所収。

(17) 今回検索した史料は以下の通りであるが、いずれも「須弥座」「須弥壇」の語は見出しえなかった。もとより不十分な検索であるが識者の御教示を乞つ次第である。『日本書紀』、

『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本

文徳天皇実録』、『日本三代実録』、『東大寺要録』、

『法隆寺伽藍縁起^并流記資財帳』、『大安寺伽藍縁起^并流記

資財帳』、『元興寺伽藍縁起^并流記資財帳』、『法隆寺縁

起^并資財帳(東院縁起資財帳)、『西大寺資財流記帳』、

『阿弥陀悔過料資財帳』、『多度神宮寺伽藍縁起資財帳』、

- 『観心寺縁起実録帳案』、『安祥寺伽藍縁起資財帳』、『広隆寺資財帳』、『河内国観心寺縁起資財帳』、『広隆寺資財交替実録帳』、『筑前国観世首寺資財帳』、^{②①}『神護寺実録帳写』、^{②②}『伊勢国近長谷寺資財帳』、^{②③}『今昔物語集』、^{②④}『宇治拾遺物語』。 については「六国史索引」(吉川弘文館)、『続日本紀索引年表』(新日本古典文学大系別巻、岩波書店、二 年)のほかいわゆる電子図書館でも検索をおこなった。 については竹内理三編『寧楽遺文』中巻(東京堂出版、一九九二年 訂正七版)によって検索し、松田和晃『索引対照 古代資財帳集成 奈良期』(すずさわ書店、二一年)所載の索引も参照した。 については松田和晃『索引対照 古代資財帳集成 奈良期』により検索した。 ^{②②}については竹内理三編『平安遺文』第一巻(東京堂出版、一九六七年、第二刷)により検索した。^{②③}^{②④}はさしあたり角川文庫版の巻末索引によった。
- (18) なお、前掲『岩波仏教辞典』「須弥壇」項は、「須弥壇の用語は近世にはいつてからのものらしく、中世までは 仏壇 と称している」とするが、『聖徳太子伝私記』の用例を見落としたものであろう。
- (19) 『奈良六大寺大観』第二巻「法隆寺」二一(岩波書店、一九六八年)、『法隆寺昭和資財帳調査完成記念 国宝法隆寺展』図録(NHK発行、小学館制作、一九九四年)、『法隆寺 日本仏教美術の黎明』図録(奈良国立博物館、二一年 四年)など。なお本論文所載の図版のうち法隆寺金堂釈迦三尊像・同薬師如来像・同阿弥陀如来像の各須弥座彩画についてはすべて右の三書から複写した。
- (20) 前掲(19) 所収解説。
- (21) 薬師像の須弥座には上座・下座ともに天部像は確認されていない。
- (22) 松浦正昭「釈迦三尊像台座」解説(前掲(19))。
- (23) 浅井和春「金堂に住まう仏たちの世界」、『週刊朝日百科 本の国宝』一「奈良・法隆寺」一、朝日新聞社、一九九七年。
- (24) 阿弥陀像の下座天板上面には現在の安置像と異なる像を据えていたらしき痕跡のあることが指摘されており、薬師像の須弥座も他像の台座の転用が充分に考えられる。
- (25) 宮殿部背面の彩画については豊鷲山図とみるのが一般的であるが多宝塔供養図とみる見方もある。玉虫厨子の研究史については林良一・鈴木嘉吉「玉虫厨子」(『奈良六大寺大観』第五巻「法隆寺」五、岩波書店、一九七一年)、片岡直樹「玉虫厨子」(大橋一章編『法隆寺美術 論争の視点』、グラフィ社、一九九

八年)を参照。

- (26) 小野玄妙「須弥山古図考」(『東洋哲学』一五ノ一・一一、一八七八年。同『仏教美術』甲子社書房、一九二六年、所収)。

- (27) やや唐突めくが、このことは中国長沙馬王堆漢墓出土の丁字形帛画の形状が崑崙山を表象することに似る。山本陽子氏

(『長沙馬王堆漢墓出土の丁字形帛画の形状に関する一考察』『仏教芸術』一五三、二 年)によれば、崑崙山への昇仙のさまをあらわしたこの帛画に崑崙山そのものが描かれていない

のは、帛画の丁字の形そのものが「オーバーハング」した仙山(崑崙山)の形状をあらわしているからだという。私が主張したいのはこれと逆の論理である。

- (28) 図23の描き起し図は、松本伸之「東大寺大仏蓮弁線刻画の図様について」(『南都仏教』五五、一九八六年)によった。

- (29) 出口常順「四天王寺五重塔基礎下の遺構と須弥山説」(『東洋美術』二二、一九三五年)。なお、図24は同論文掲載のもので佐藤佐氏の作図になる。

- (30) 『阿毘達磨俱舍論』、大正蔵第二九卷五九〜六 頁。

蘇迷盧山有四層級。始従水際尽第一層。相去十千踰繕那量。如是乃至從第三層尽第四層亦十千量。此四層級從妙高山傍出圍繞尽其下半。最初層級出十六千。第二第三第四層級。如其

次第。八四二千。有藥叉神名為堅手住初層級。有名持鬘住第

二級。有名恒住第三級。此三皆是四大天王所部天衆。第四層級四大天王及諸眷屬共所居止故。經依此說四大王衆天。如妙高山四外層級四大王衆及眷屬居。如是持双持軸山等七金山上亦有天居。是四大王所部封邑。是名依地住四大王衆天。於欲天中此天最広。三十三天住在何処。頌曰。

妙高頂八万 三十三天居 四角有四峰 金剛手所住

中宮名善見 周万踰繕那 高一半金城 雜飾地柔軟

中有殊勝殿 周千踰繕那 外四苑莊嚴 衆車 雜喜

妙池居四方 相去各二十 東北円生樹 西南善法堂

論曰。三十三天住迷盧頂。其頂四面各八十千。與下四辺其量

無別。有余師説。周八十千別説四辺各唯二万。山頂四角各有

一峰。其高広量各有五百。有藥叉神名金剛手。於中止住守護

諸天。於山頂中有宮名善見。面二千半。周万踰繕那。金城量

高一踰繕那半。其地平坦亦真金所成。俱用百一雜宝嚴飾。地

触柔軟如羅綿。於踐躡時隨足高下。是天帝所都大城。

- (31) 前掲(28) 松本論文。

- (32) 石田尚豊「玉虫厨子絵考」(『国文学』一一六・一一七合併号、一九八二年。同『日本美術史論集』中央公論美術出版、一九八八年、所収)。

(33) 図25の描き起し図は、『図説 歴史散歩事典』(山川出版社、一九七九年)に、図26の描き起し図は、岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」(金子裕之編『古代庭園の思想 神仙世界への憧憬』角川選書、二二一年)によった。

〔付記〕

本稿は二 六年度早稲田大学美術史学会第一回例会(同年一月一日、於早稲田大学)における口頭発表の内容の一部に基づくものである。発表時には先学および学兄諸氏より有益な御助言をいただいた。感謝の意を申し述べたい。

なお末尾ながらこの小論を近藤大介君の霊前に捧げたい。同君は新潟産業大学人文学部を首席で卒業後、同大学院経済学研究科に進み修士論文作成に向けて勉学に励んでいたが、二 六年八月五日持病の悪化により歸らぬ人となった。無念である。仏教美術にも関心のあった同君は私のゼミの研修旅行にも特別に参加し、ゼミ生の面々とともに奈良の地を歩いたものである。時折研究室を訪ねて来ては私の研究の着想に耳を傾けていった同君。この小論を綴りながらも私にはそうした彼の姿が思い出されてならなかった。記して冥福を祈る。

(二 七年二月校了)